

大野の女子勤労挺身隊 (二)

落下傘づくりのかたわら、悪条件の寮生活に耐えた挺身隊員たち。

大変だった通勤電車(続き) 押上駅から七、八分も歩く

軍需工場らしく、会社の周囲にはいかめしく高い塀がめぐらされ、門には守衛所があった。「あけぼの寮」があのよう

食事は数百人が一度に食事できるほど大きなものだった。食卓にはこの食堂が満員になると聞かされた。

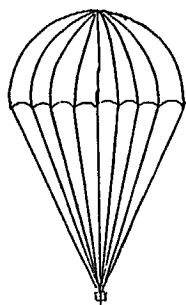
最初の日、朝食のご飯は五分づきくらいの米の中に豆が半分くらい入っていた。しかし、ご飯だけは何杯でも食べられたので、大阪方面の挺身隊に比べたら食糧事情には恵まれていた。

朝食を終えた一行は、また講堂に集められ、作業分担が決められることになった。落下傘づくり

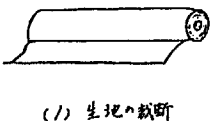
会社の人の話から、落下傘の種類も兵隊の降下用から各種兵器・物資などの降下用とその大きさに幾種類もあること

とを一行は知った。落下傘づくりの工程は左図の通りである。

寒中も火の気のない寮に震えながら寮に帰っても、部屋には火鉢さえ置いてなかった。寮母たちのいるところ



落下傘の原反(絹羽=重)



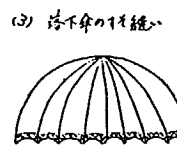
(1) 生地を裁断



(2) 縫合

裁断した生地を落下傘の形に縫い合わせる(落下傘の原反の重さ)

絹羽=重の生地を落下傘の一片の形に裁断する。



(3) 落下傘の縫合



(4) ヒモ作り



(5) 落下傘の完成

落下傘にヒモを付ける部分からなるヒモの端を縫い合わせる(絹羽の重さ)



(6) 仕上げ(ライオンがたむ)

そのヒモを付ける部分からなるヒモの端を縫い合わせる。電動ミシンで縫製している。

寝具は、一人に掛ふとん一、敷ふとん一、二枚だった。毛布の有無は記憶がなく

慰問の食べ物分け合って ときどき大野から慰問の小包が寮に送られてきた。中身はたいして食べ物で餅やだんご、大豆の煎ったもの、水飴

清水水院)が前年、東京帝国大学に入学し、中野さんの親戚の樋渡竹松さんの近くに

東京に親戚のある人はよかったです。ない人はさびしい思いをして

五〇〇ccの立派なもの。広い庭にはリンゴ・モモ・ブドウなどたくさん種類の果物が

ハンガリーの首都ブダペストで開かれるフレンドシップフォーラム(国際的な友好・親善を深めるための民間団体)・フェスティバルに参加するため、七月十九日から十八日間、激動の東欧のうちハンガリー、チェコスロバキアの二か国を訪問しました。

まではかたくなに無表情だった顔が一瞬ほころび、視線を向けてみせる。そこにあどけなさが感じられて、彼らもまた職務上やむを得ないという

時からホテル・マルテルの大広間で、ブダペスト市長のあいさつから始められた。大作曲家リストを生んだ音楽の都

言ではない繁栄と豪華が、中世そのままに現代に伝えられていること

この一家は大変な東洋趣味東洋びいきで、中国・韓国・日本の掛軸や木彫の仏像や置物

モスクワ経由ブダペスト入り 七月十八日午後六時、乗り継ぎのため到着したモスクワのシエレメチエボ空港ではボ

こうしたモスクワでの入国審査の厳しさに比べ、つい先ごろまで同じ社会主義の国で

大会二日目の午前中は市内の観光だった。古都ブダペストの古い王宮や教会、そして今は博物館となっているお城など

私たちはブダペストから一時間ほどのセカシフェールパールという町へ案内された。

セカシフェールパールという何度聞いても覚えられない名前前の町は、どういいうわけか

私の東欧見聞録①

日本語の盛んなハンガリーの町に滞在

竹石貞三郎

ら見下す入国審査官は、いずれも二十歳そこそこといった、まじめそうな青年たちであ

へ迎えるガイド嬢が「フレンドシップ歓迎」の紙片を広げて、ほほえみながら目の前に

術の粋をほどこした建造物、銅像やレリーフ、そして調度品等、世界最高と言っても過

私たちのホスト家庭はかなり裕福な家庭のようだった。四十歳半ばのご主人は、中古

そのいきさつを聞いた私たちは、日本料理とは言わないまでも、御飯を炊いて焼き飯

それが「スパシーバ(あるいはとう)」などとお世辞の一つでも言おうものなら、それ

古都ブダペストで感嘆 フレンドシップフォーラム世界フェスティバルの歓迎晩餐



ブダペスト市内で

家は総二階五LDKほどで、車はソ連製のLADAであるが他ではあまり見られない

以下次号)